

慈明院寺報九月号

いろは歌の元ネタ

お寺の法会や葬儀・法事の席で、「いろは歌」という御詠歌を唱えている。

御詠歌は元々、四国や西国三十三観音霊場などを巡拝する際に唱えられていた巡礼歌が起源である。仏様の徳を讃えたり、供養の意味が歌詞に込められている。いろは歌にも仏教の故事と教えが詰まっている。

昔々、雪山童子という修行者がおりました。ある日、童子が山中で修行をしていると恐ろしい鬼が、不思議な詩を唱えているのを耳にしたのです。

『諸行無常 是生滅法（この世に在るものはすべて移ろい、変わらぬものは何も無い。生じたものは必ず滅していくことが、本来の道理である。）』

それを聞いた童子は鬼の前に進み出て、詩の続きを唱えてくれと頼みました。しかし、その鬼は空腹で童子を食べさせてくれるなら、続きを教えると答えたのです。童子が約束を守ることを誓うと、鬼は再び詩を唱えました。

『生滅滅已 寂滅為楽（生じることや滅することの苦しみから離れ、心が静まっていることが、本当の安らぎなのである。）』

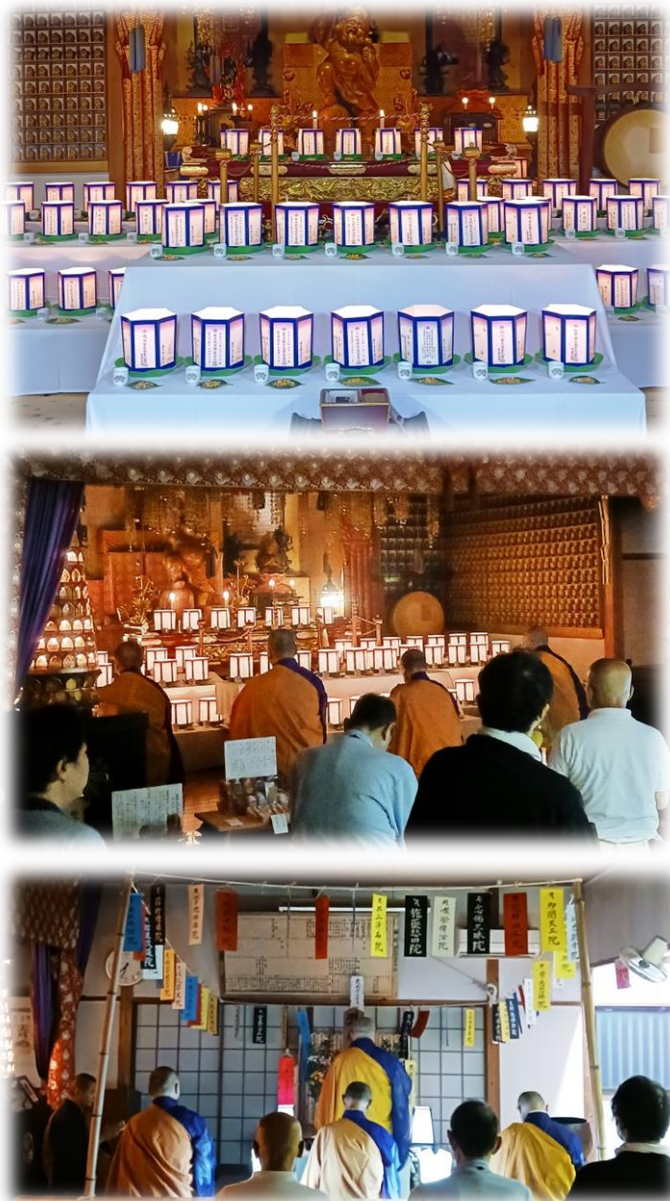
童子は喜び、この詩を多くの人に伝えるため岩に刻み込むと、約束通り鬼の口に身を投げました。すると鬼の姿は、帝釈天という神様に変わり、童子を空中で受け止めて、優しく地上に降ろし礼拝したのでした。この雪山童子こそ生まれ変わる前の、過去のお釈迦様であると伝わっています。（涅槃経巻十四）

いろはにほへち
色は匂えど散りぬるを（諸行無常）
我が世誰ぞ常ならむ（是生滅法）

ういおくやまけふこ
有為の奥山今日越えて（生滅滅已）
浅き夢見じ酔いもせず（寂滅為楽）

うるわ
麗しく香る花々もやがて散っていく。常に変わらないものなど何処にあるうか。
形あるものに囚われ、迷っていた山道を今日越えていこう。もはや浅はかな夢に惑わず、酒に酔ったような生活をするまいという教えである。住職 合掌

残暑や台風で体調を崩されていませんか。初秋お伺い申し上げます。
令和五年七月二十九日（お施餓鬼）灯籠供養を勤めました。今年は四人の僧侶にご助法頂き、無事に法会を行いました。灯籠供養をお申し込み頂いた皆様、あるいはお盆まいりでお世話になった皆様に厚く御礼を申し上げます。



しゅうきひがん
秋季彼岸・塔婆供養法会のご案内（別紙参照）

来る 令和五年 九月二十三日（土曜日）秋分の日

午前十一時より

どなたでも塔婆のお申し込み、当日のご参拝は出来ます。案内状をご参照頂き、宜しければお参り下さいませ。（昼食、大黒饅頭をお接待致します）



じみょういん

慈明院（〒八一一一三三 福岡市早良区大字西二三四一・二〇）

TEL（〇九二）八〇四・四五七〇 FAX（〇九二）八〇四・四六〇五

よしずみだいじ

住職・吉住大慈 携帯電話〇九〇・（五二八一）・七四九四